新収作品：クロード・ローラン《踊るサテュロスとニンフのいる風景》

昭和50年度の新収作品について

山田　智三郎

国立西洋美術館は，昭和50年度に，1億2,300万円の購入費をもって，絵画4点，彫刻1対2点，素描1点を購入し，さらに，文化庁に特別にお願いして，その特別購入費によって2点の油絵を購入して頂いたものを当館に管理換させて頂いた。それら各作品の題名とデータについては別項の購入作品目録および管理換作品リストを御覧頂くことにして，ここにはそのうちの主なものについてのみ報告する。（寸法の単位はメートル。縦×横の順）

購入作品

15世紀フランドル派「悲しみの聖母」

油彩　板　0.496×0.354

15世紀の後半，ディリック・バウツ（1415頃—75）その他によって，しばしば描れた，涙を流す「悲しみの聖母」図の一つである。この構図は元来，「荊冠のキリスト」の顔を描いたものと一対として構想されたものであるが，現在，キリストの顔を描いたものよりも「悲しみの聖母」図の方がより多く残っているところを見ると，聖母礼拝の対象図として，この図のみ描れた場合もあったのではないかとも考えられる。16世紀後半以後は，この図のみ描れた場合が多い。本作品図もそうしたものの一つか，或いはもとは「荊冠のキリスト」と一対をなすものとして描れて，キリスト図の方が失なわれて了ったものか，その点は分らない。

金地をバックにした本図の構図は，バウツの描いた「悲しみの聖母」に近いが，そのかぶり物や両手の描き方は，ルーヴルにあるロジェ・ファン・デル・ヴェイデン（1400頃—1464）作「ド・ブラック祭壇画」の，聖母と福音者ヨハネとの間にキリストを描いた中央パネルの，キリストを礼拝する聖母のそれに近似している。然し，本作品のマドンナの顔のモデリングは，ロジェよりも，またバウツよりも，やわらかく丸身がある。本図は彼らよりもより若い，そしてどちらかのアトリエ出身の画家によって，15世紀末描かれたものかと思われる。

この絵の購入によって，西洋美術館はパティニール作「エジプトへの逃避上の聖母子」と「聖ルチア伝の画家」作の「聖ヒエロニムス」と合せて3点の初期フランドル画を所有することとなり，中世薄暮期の美しさと近世黎明期の清新さとをあわせもった初期フランドルの宗教芸術と自然美表現の発達とを一通り示すことが出来るようになった。

フィリップ・ド・シャンパーニュ筆

「マグダラのマリア」

油彩　カンヴァス　0.725×0.59

フランドル出身のフィリップ・ド・シャンパーニュは，はじめ，ヴァン・ダイク風の，動感の強い宗教画や肖像画を描いていたが，壮年期にポール・ロワイヤル修道院を訪れて，敬虔なジャンセニストとなって以来，その芸術の精神性を深め，質実な描写のうちに対象の内面性をよく把えた肖像画の傑作を数多く描き，同時に宗教画にも優れた作品を残している。シャンパーニュの研究家であるドリヴァル教授によれば，この「マグダラのマリア」はその後期の作品で，その時期の作品の特性である「メチエの柔軟さ・内面性・慎み深さ・精神的密度」が見られる。ただし，この絵は貴族の注文によったものであろう。ポール・ロワイヤル修道院のための

Nouvelles acquisitions

Par Chisaburoh F. Yamada

作品のような宗教的な厳しさはなく，気品ある優雅な美しさをもっている。

ドリヴァル教授の研究によれば，シャンパーニュが「マグダラのマリア」の上半身を描いた絵は3点現存しており，その1点はヒューストンの美術館にあるもので，1648年の作，第2はそのレプリカで1657年の作，第3が本図で，ルイ14世の名宰相コルベールの所蔵であった可能性が強いという。コルベールが所蔵していたシャンパーニュの「マグダラのマリア」図は，その後画家エティエンヌ・ルシュールの所有となったが，彼のコレクションが売立てられた1791年11月22日のオークションの目録に出ているその絵の寸法と，本図は同寸法であるからである。

ウジェーヌ・ドラクロア筆
「墓に運ばれるキリスト」1859年作
油彩　カンヴァス　0.56×0.46

大作ではないが，ドラクロア晩年の名作の一つである。有名な晩年の傑作「レベッカの掠奪」(100×81cm　1858年作）や「十字架の道行」などと共に1859年のサロンに出品され，評判となった作品である。ボードレールは，彼の有名なサロン評のなかで，この絵をティチアノの仕事と比べて絶賛している。

上記3点の外に，ルオー晩年の力作で，道化の顔を描いた「リュリュ」（油彩，39.5×25cm）1点と，ブーシェの素描「ヘベ（赤と黒のチョークに白のハイライト，36.0×22.8cm）を購入した。前者は梅原龍三郎氏がルオーから直接手に入れられたもの。後者は素描ではあるが非常に丁寧に描き込んであって，ブーシェ芸術の装飾美と魅力を十二分に示す非常に美しい素描である。さらに18世紀の装飾的彫刻芸術を示すものとして，コルネイユ・ヴァン・クレーヴの作と考えられるブロンズ彫像一対を購入した。「ヴィーナスとキューピッド」と「プシュケとキューピッド」を現わしたものである。このうちの後者と同じものの別のキャストがウォーレス・コレクションに所蔵され，作者不明の18世紀のものとして出陳されているが，この一対は，ヴァン・クレーヴが1704年のサロンに出品した「セレーネとエンディミオン」に様式上近似しているところから，彼の作と考えられる。優雅な美しさに満ちたこの一対は1710年代のレヂャンス様式に近いものを既に示しており，「セレーネとエンディミオン」よりさらに晩年の作と思われる。

コルネイユ・ヴァン・クレーブは，1645年パリに生れたフランドル系の彫刻家で，ローマで6年，ヴェネチアで3年勉強した後パリに帰り，ルイ14世の宮廷のための仕事をした。1681年にはアカデミーの会員になっている。

管理換

上に述べたのは，本館の作品購入費をもって購入したものであるが，本年は別に文化庁より下記の2点の油彩画を所管替えして頂いた。そのうちの1点のルノアールは，昨年度文化庁にお願いして購入して頂いたものであり，他の1点，クロード・ロランの名作は，本年度，文化庁に特にお願いして西洋美術館のために購入して頂いたものである。

ルノアール筆　1916年作

「風景の中の三人」

油彩　カンヴァス　0.653×0.543

ルノアール最晩年の，手が不自由になってはいたが，円熟し切った画境のうちに制作された，豊潤な色彩の作品である。旧所有者である梅原龍三郎氏によると，1965年パリの画商のところで見て，その美に魅せられて手に入れられたものという。この絵は，ルノアールの死後そのアトリエにあったもので，ベルネイム・ジューヌ編さんの "L'Atelier de Renoir" 第2巻の図版177に載っており，その題名は「風景の中の3人の女」(Trois femmes dans un paysage) となっている。しかし，よく見ると3人の人物中の1人は男性と考えられるので，当館では「風景の中の3人」と題することにした。晩年のルノアールとその家族を親しく知っておられた梅原龍三郎氏によると，描かれているのは息子のジァン（向って右）とその妻およびモデル，ガブリエル（向って左）であるという。

クロード・ロラン

「踊るサテュロスとニンフのいる風景」

油彩　カンヴァス　0.98×1.25

署名　年記1646

この絵は18世紀から英国にあってよく知られた絵であったが，1918年，ホウ伯爵所蔵品の売立てで売られて以来所在が不明になっていた。近年ブルッセルのコレクターが所有していることが知られ，その絵をパリのエイム画廊が買ってスイスに保存してあったものである。それを本年度，文化庁長官と文化財保護部および大蔵省の関係官各位の理解ある御好意によって，文化財保護部の特別購入予算をもって購入して頂き，今まで日本では見られなかったフランスの古典的風景画の典型的な作品を日本の方にお見せすることが出来るようになったのは嬉しい。

周知のように，クロードはその油絵作品の構図をスケッチして記録し，「リベル・ヴェリタティス」と題するアルバム（大英博物館所蔵）に集大成しているが，その108番にこの絵は描かれている。ただ，素描には空に数羽の鳥が飛んでいるが，本図には描かれていない。

クロード・ロランの全作品目録（「クロード・ロラン」，プリンストン大学1961年刊）の著者であるジュネーブ大学のロトリスベルガー教授は，この絵がベルギーで再発見されて間もなく，イタリアの美術史研究誌「パラゴーネ」に論文を発表し（Nuovi Aspetti di Claude Lorrain, Paragone, 1972）この絵について詳述しているが，それによると，この絵に署名とともに書かれた年記の最後の数字は明らかでないが，6と判読され，1646年の作と考えられる。この絵を注文したデュフールはリヨンの大商人で，人文学者であり，コレクターでもあったという。クロードがあまり描いたことがないパンとニンフを主題に選んだのも，デュフールの注文による可能性が強く，しかも結婚を記念しての注文であったかも知れないと同教授は推論している。

前景右手に描かれたパンは花冠をつけ，同じく花冠をつけた1人の美しいニンフと並んで腰かけ，中央より左寄りに描かれたサテュロスとニンフの踊りを見ている。特定の神話を主題とせぬ，二人の愛を祝福するような情趣豊かな，典雅な情景である。

しかし，この絵の本当の主題は，幾分理想化された，所謂ヒロイック・ランドスケープであることは言うまでもない。右手に巨大な樹々が繁る丘があり，左半分には，遠くの山にまで拡がる，ゆるやかに起伏する丘と湖のある広大な空間が描かれ，おそい午後の陽光が照し出す風景の美しさが，細部に至るまで鋭敏，繊細な感覚でとらえられている。

微妙な調子の変化で描き出されている，近景から中景をへて遠景に至る空間の拡がりは，見る人の心を大きくするような効果があり，この画家が大成したヒロイック・ランドスケープの真価を示している。

寄贈作品

昨年度時価総額5億円にも達する名作7点を寄贈して下さった梅原龍三郎画伯は，今年度さらに，高さ60cmもあるキュクラデス彫刻の名品と，ルノワールが若い時ルーヴルで，ルーベンスの「マリー・ド・メディシスの生涯」シリーズのうちの「マリーの統治」を模写した油彩画を寄贈して下さった。後者は394×702cmの大作を，45.8×83.5cmの小画面に，生命感溢れるドラマチックな動き，豪華な色彩，しっかりしたモデリングなど，原画の美しさを少しも損わずに生き生きと模写したもので，当時僅か25歳であったルノワールの達者な筆技に感心させられる。なお，ルノワールの研究家で，ルノワール全作品集の編著者であるフランソア・ドールト氏は，ルーヴル美術館で，ルノワールがこの絵の模写願いを提出した時の書類を発見した由である。

このような貴重な美術品を寄贈して下さった梅原画伯に，本館を代表してここに深甚の敬意と感謝の意を表する。

この外，画商水嶋徳蔵氏がジョン・E・ミレイ（1829—1896）の「あひるの子」を寄贈して下さった。もと松方コレクションにあったもので，その後神戸の和田コレクションにあったが，近年水嶋氏が購入，寄贈されたものである。署名とともに1889年の年記があり，ミレイ晩年の作である。ミレイはホルマン・ハントとロセッティとともに1848年プレ・ラファエライト兄弟団を組織して，プレ・ラファエライト運動を起したが，1853年頃より次第にこの運動より離れて描法が写実的になった。1863年頃よりは，さらに自由で大まかな筆遣いで，幾分ロマンティクなところのある，詩的な題材を好んで描いた。これは彼のそうした後期の様式を示す可愛らしい絵である。英国絵画にとぼしい本館としては，ヴィクトリア女王時代の英国絵画の一典型であり，しかももと松方コレクションにあったこの絵を寄贈して頂いたことは有難い。水嶋氏に厚く御礼申しあげる。